被災地外救護活動を経験して

長岡市・三上医院
三　上　　理

平成16年10月23日土曜日、その当時は長岡赤十字病院に勤務し、救命救急副センター長でした。早速救護班が作られ、センター長はそちらに、私は救急外来でトリアージを始めました。そんな経験から本来なら現地で救助活動をと、考えましたが、今回、たとえ数日とはいえ、臨時休診はとれませんでした。

今回の大震災では、長岡市にも福島から多数避難されているとのことで、避難所となった南部体育館での巡回の要請をいただきました。平成16年当時も数日は避難所生活を実際に経験しましたが、あの当時はライフラインが戻るまでの数日間だけでしたが、今回は全く縁もゆかりもない長岡という街に来られて、本当にどんな気持ちであったのか、全く想像を絶する状況です。

初めて避難所を訪れたのは、４月３日日曜日でした。そこには、わずかばかりの日常生活品と寝具の山がずらりと並んでおり、家族単位ではありましたが、全くプライバシーはありません。これは、助け合う心を持った日本のよいところでもあり、大きな問題でもあると思います。実際の避難所巡回は、医師会として薬剤の準備もなく、診察と相談が主体でしたが、印象に残ったのは、うつ病の女性でした。体育館では毎晩眠れず、ずっと泣いていたとのことで、階下の準備室で一人、布団にくるまっていました。いろいろと薬物療法はされていましたが、一番必要なのは家族であり、話を聞いてあげられる専門家であると実感しました。様々な疾患を持った集団でしたが、慢性疾患が中心で、被災地ではない避難所ですので、慢性疾患の管理や急性疾患も休日夜間診療所あるいは２次、３次救急病院へつなぐことが可能です。このような被災地以外の避難所における医療需要は、いかに話を聞いてあげられるかが求められていると実感しました。

未だ、長岡市には400人を超える避難者が生活されています。これから厳しい冬を迎え、高齢者の肺炎、孤独死など、今後も可能な限りサポートは続けていく必要がありそうです。過去の経験から、第三者である我々が、特に避難所でサポートする姿勢として、どこまで踏み込んでいいのでしょうか？避難所は彼らの家であり、プライベートな空間でもあります。今回のような長期間に及ぶ避難生活では、我々はあくまでも陰からの支持者であることを忘れてはいけないと思います。

最後に、今回の被災者全員に安泰な日常がくることをお祈りいたします。